

掘り出されたニカラグア内戦の傷

長谷川 悅夫 (はせがわ えつお)

法政大学非常勤講師

日本人が盗掘している!?

一〇年近く前、わたしは中米ニカラグアの内陸部で先スペイン期の遺跡群を調査していた。人口五万人の町の周囲に牧草地が広がり、マウンド遺跡が点在していた。我々はジープで山野を走っては遺跡を見つけ、地図上に位置を落とし、写真撮影と測量をおこなった。調査チームは四人。わたしをリーダーとして、学

書いた「外国人の盗掘を許さず、文化財を守る」という趣旨の「勇ましい」投稿が掲載されてしまった。引っ込みがつかなくなつた市長は再び態度を硬化させた。

首都の国立博物館の考古学者は、わたしの飲み友達だった。彼自身は社会主義政党的支持者だったが、文化庁長官に「今回件でハセガワには落ち度は無く、市長らの政治的抗争の手段に利用されただけだ」と意見書を書いてくれた。結果、彼は訓告処分を受けた。

調査地でも我々を警戒する人ばかりではなかつた。高校生たちがやつて来て、データの整理を手伝つてくれた。生徒会長はフジオで我々を擁護する発言してくれた。町の博物館の館長が主催する文化サークルにも呼ばれて激励された。我々を非難する記事を書いた新聞記者とも、最初こそ敵対的だつたが、道で立ち話などするうちに打ち解けてきた。自身余りにも扇情的な記事を書いたことを自覚していた。仕事柄遠い国から来た我々に興味をもち、情報も欲しがっていた。

やがて雨季が始まり、結局は調査を開できずに帰国することになつた。空港に来てくれた考古学者が言った。「国民党が憎み合つているのは悲しい。内戦が人びとを引き裂いた。友人も家族も」。わたしは町の博物館の館長の協力を仰い



ある日、調査を終えて町に戻ると、博物館の館長が慌てていた。「日本人が盗掘をしているというニュースが流れた。反論の会見を用意しておいたからすぐに来い」。わたしは訳もわからずに地元テレビに出演して、「盗掘をしているのではない」と説明した。

噂の出所は、遺跡のある土地の所有者生が二人、そして町の博物館の館長の息子である。

そこで、地元の理解をえたつもりでいたが、軽率だった。人口五〇〇万の国がふたつに割れて殺し合い、一〇万もの死者を出した過去の傷は深い。人びとの内閣の息子は、内戦時はまだ子どもだった。彼は「俺の一家を目の敵にして、政治的な策謀だ」と憤慨していた。

第二の問題は、文化庁が発行した調査許可証の文面であった。これにはわたしが調査地とした県の全域で「発掘をおこなう」と記載されていた。しかし、敵愾心は日常生活では表に出ない。しかし、微妙なバランスの上に平穀があり、外からやって来た外国人がどちらかの側につくと、バランスは崩れて争いが

表面化する。埋蔵文化財という人びとの心の琴線に触れる問題が絡むと、さらに援者の説得も功を奏して、前日には市長も態度を軟化させていた。ところが、話し合い当日の新聞に、市長が何日か前に

だつた。近隣住民の話では、近くに住む老人が土地所有者とのことだつた。我々は老人の許可をえて遺跡に立ち入つた。実際は、法律上の土地所有者は老人の息子で、彼が我々を「私有地への侵入と盗掘」で告発していた。わたしは医師である土地所有者を訪ね、彼の父親を所有者と思いつきをえたこと、「センチメートルたりとも発掘はしておらず、測量を起こなつただけであることを説明し、文化庁の調査許可証も提示した。

それから二日後、今度は全国紙の一面に「日本人盗掘者」の記事が出た。また、外国人の「盗掘」を許しているとしてニカラグア文化庁も批判されていた。我々は調査を中止した。

事ここに至つて、この騒ぎが単なる誤解によるものではないことがわかつてきた。最初の問題は、わたしの協力者となつてくれた博物館の館長の家族に内戦時（一九八〇年代）の反革命軍の重要な人物がいたことだ。社会主義政党（旧革命政権）の支持者たちが、わたしを敵とみなした。わたしは政治にかかわるつもりは無かつたし、行動とともにしていたが、軽率だった。人口五〇〇万の国がふたつに割れて殺し合い、一〇万もの死者を出した過去の傷は深い。人びとの内閣の息子は、内戦時はまだ子どもだった。彼は「俺の一家を目の敵にして、政治的な策謀だ」と憤慨していた。

第三の問題は、中央政府と地方自治体の対立である。わたしは、調査地に来てすぐに市長にあいさつをするべきだった。博物館の館長に、市長への表敬訪問を設定してくれと頼んではいた。しかし延び延びになつていたのだ。現地ではすでに雨季が迫り、我々は雨が降る前に調査を進めておこうと時間を惜しんだ。これが仇となつた。市長にとって、文化庁からの許可を振りかざした傲慢な外国人が、自分の市で勝手なことをしていると思えたのだ。

微妙なバランスの上に平穀